〔新収品紹介〕

神奈川風景図　谷文晁筆　享和2年（1802）

絹本著色　41.6×69.6㎝.

このたび当館では江戸時代後期の画家谷文晁（1763～1840）の描いた『神奈川風景図』を入手し、「江戸時代の絵画」展で初公開しますので、ここに簡単なご紹介をいたしましょう。

この絵は絹地に在来の日本絵具を用いて描かれていますが、山水画というよりも近代的な風景画というべき作品です。神奈川は現在横浜市の一部に入っていますが、もとは東海道第四番目の宿駅で、川崎から二里半（10キロ）のところにあります。この絵は神奈川の宿駅の上部にある神奈川台とその南方にひろがる海を表わしたもので、幕末の風景版画家安藤広重も、有名な保永堂版『東海道五十三次』（1833年～34年）の中の一図で、この場所をとりあげています。

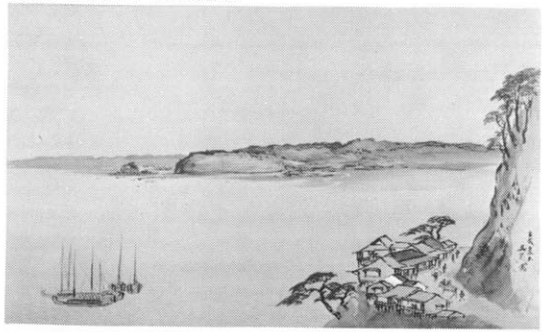
広重の版画は坂道に沿う料理屋の女が客引きするところを表わしていますので、それより約20年前に描かれたこの文晁の絵でも、前景に見える屋並はきっと料理屋なのでしょう。ちなみに、この辺は現在でも料理屋が多いのです。左手にひろがる海は昔からの神奈川の港ですが、明治の初年に埋めたてられて、いまは横浜市街の一部になっています。

筆者の谷文晁は士族の家系で、詩人として名のあった谷麓谷の子です。画家をこころざして、はじめは狩野派や南蘋派を学びましたが、やがては南宗画の技法も習得しました。文晁の作品は主に中国の明清の北宗画風を基礎にして、それに南宗画の要素を加味したものですが、一方では大和絵もよくし、さらには写実主義を求めて西洋画法も研究しています。このような多方面の画技が幕府の権力者であった松平定信に認められ、彼は定信の御用絵師となり、かたわら江戸画壇の第一人者として、多くの門弟を擁するようになりました。

文晁が西洋画の陰影法や遠近法を摂取した風景写生として有名なのは、『公余探勝図巻』（重要文化財、東京国立博物館蔵）です。これは松平定信が寛政５年（1793）に海防のため伊豆と相模の海岸を視察したとき、それに従ってそれらの地方の景色を写したものです。『神奈川風景図』はそれより約10年後の作品ですが、やはり透視遠近法を用いて描かれています。文晁が西洋の銅版画を持っていたことは、彼の著『文晁画談』により確認されますので、彼はそのような輸入版画によって西洋画法を学んだのかもしれません。しかし、彼の時代には有名な司馬江漢（1747～1818）がいて、銅版や油絵の技法により多くの日本風景図を描いていましたから、文晁はむしろ江漢の洋風画に学ぶところが多かったと申せましょう。

（成瀬不二雄）

神奈川風景図　谷文晁筆



季刊 美のたより No.58
昭和57年３月４日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.